

「カイメンタケ (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

サルノコシカケの仲間(ツガサルノコシカケ科やマンネンタケ科)のキノコは、通常木質で多年生のものが多い。しかしカイメンタケは「海綿茸」の名の通り、スポンジ状の軟質で、子実体の寿命も短い。要はサルノコシカケらしくないサルノコシカケなのだ。



カイメンタケを横から観察していて、奇妙な特徴に気づいた。このキノコはカラマツの林に発生していたが、林床には下草も多い。その下草を子実体がかんでいるのだ。細長い草の数本が、子実体を突き抜けているが、枯れてはいないようだ。



写真でもわかるように、明らかに下草のほうが先に生えている。つまり、下草のほうが子実体(キノコの本体)を突き抜けたのではなく、子実体のほうが、もともとあった下草を巻き込んで成長しているとわか

る。実に興味深い。これはカイメンタケに限らず他のサルノコシカケの仲間でのよく見られる現象で、実は珍しいことではない。ツガサルノコシカケやマンネンタケでも同様の様子を観察したことがある。



数日後にもう一度観察に行ったら、同じ場所にあった。キノコの子実体は、通常数日で朽ちることが多いが、さすがにカイメンタケは表面が革質の強靱な子実体なので、そう簡単には腐らないようだ。しかし、色は黄土色から茶褐色に変化して、明らかに「老化現象」が起きていた。



更に数日後、このような状態になっていた。色は「黒紫褐色」に変化し、スポンジ状だった子実体は、硬くなり始めていた。見たところ虫に食われたような形跡もない。どうやらカイメンタケは、胞子を飛散させたあと、「腐る」のではなく「干からびる」という経過をたどって、一生を終えるらしい。